

Scrapbook de Paris

par Mariko Omura

パリのスクラップブック 016 大村真理子 パリ支局長

自然の未来が気になる今、 緑の男、ここにあり。

ジャン・ヌーヴェル建築で昨年オープンした話題の美術館ケ・ブランリーの壁にも！植物学者パトリック・ブラン氏が作り上げる垂直の庭は、この10年の間にイタリア、アメリカ、ブラジルなど海外でも見ることができるようになった。美術館やホテルに留まらず、公の目には触れない個人宅からのオーダーもある（あぁ、羨ましい）。3月18日までパリでは、彼が構想した展覧会「植物の狂気」を開催

中。会場のスクリーンに熱帯地方の植物の驚異を語る彼が登場すると、どよめきが起こる。何しろ髪の毛から着ているものまで緑色。その上、長い爪は緑色にマニキュアされているのだから。植物の化身のようなブラン氏。それは外見に限らない。タイのショッピングモールでの彼の仕事を追いかけたTV番組では、光のない狭い場所に押し込まれた植物を代弁するがごとく、これじゃ苦しい。息が

できない！と彼が建築現場で訴えた話を証言する声があった。魚が生きる世界を小さく再構築した水族館への興味をきっかけに、湿った熱帯地方の植物に興味を持ったブラン少年。19歳のときに東南アジアへと旅立ち、以来30年以上、緑の男はこの分野の研究を続けているのだ。植物の壁を最初に手がけたのは1998年で、特許申請も同年実施している。展覧会場に戻ろう。学者として

彼がこの会場で見せているのは、彼を魅了し続ける逆境で生きる植物の姿だ。上から下へ伸びる洞窟の植物、岩間に根をはる急流の植物、光のない森の下で育つ植物。生命力あふれる自然で満たされた会場には、ポジティブなエネルギーが漲っている。それにしても展示をみながら熱心にノートをとる若者が多い！環境問題に敏感な世の中。ブラン氏に習えと、緑の男が繁殖(?)するのだろうか。

1.垂直の壁の例から。パリのマリテ・エ・フランソワ・ジルボー。2.ケ・ブランリー。3.カルティエ財団の入り口上の作品。1998年。4.近々BHV男の新館にも庭を完成させるブラン氏 5.自然が造型した美しくも不思議な色や形をした葉、花、実の写真も展示。6.急流に耐える健気な植物。7.幻想的な岩場。8.シルクタフタの輝きをみせるペゴニアの葉。9.チューブ20本を使い再現した洞窟が入り口に。開催期間中、植物は上から下へと伸び続けている。10.光の射さない森の下生え。植物は枯葉色をしている。

photos : Khalil (1-4), ©Patrick Blanc (5), ©Médiathèque EDF / Julien Daniel (7-9), ©Médiathèque EDF / Stéphane Remael (6, 10)



『植物の狂気』展

～3/18 Espace EDF Electra
(6, rue Récamier 75007 Paris)
12時～19時 毎月 入場無料